

歩みを進める二人の目の前に現れたのは、セカイを上下に切り開く不思議な扉だった。地上の物理学を無視したその光景に戸惑いながらも、こはねが口を開いた。

「とりあえず入ってみようか？」

「そうだな」

中には紙を握り潰したような薄汚れた空間があった。その時、空間が瞳を開けるように裂け、黒い塊が姿を表した。よく見ると、クリツとした瞳に、こぶりで丸い耳、少し尖った鼻に、笑っているような口をしている。その見た目はほぼ、黒いクアツカワラビーだった。

「何この可愛い生き物!？」

ふわふわと宙に浮くその生き物の背中には、子どもの手のひらほどの小さな翼が懸命に羽ばたいていた。擬音で表すと「ぴよこぴよこぴよこ」といった具合だ。

「なんだ？ 見たことない生き物だ」

そいつが話し始めた。

「やあ、お二人さん。私は悪魔」

「悪魔!? こんなに可愛いのに？」

「見た目で判断するなんて、頭蓋骨が空っぽだな」

「口が悪いな」

「君たちは大先生によって創られた『悪魔の踊り方』は知っているよね？」

「もちろん」

「その悪魔が私さ！」

「驚いたな……あの歌の悪魔はこんな見た目だったのか。もっと恐ろしい感じかと思っていた」

「君たちはまた見た目で判断したな？ 何十何百何千何万回学習しなさいな！」

「口調は歌詞のままなのね」

「私はとても恐ろしい悪魔なのだ。そして、ここは『信頼と時の部屋』と呼ばれている」

「信頼と時の部屋？」

「そう、この部屋では君たち二人の信頼が試される。」

そして君たちは終焉から逃れられないだろう」

「また歌詞を使ってる。あなた、あの歌が大好きなのね」

「うるさい！ この部屋によって君たちの信頼関係は失われるだろう。堕落していれば何も見えないままだ！ 思考を休めるな！ 脳ミソを回せ！」

「歌詞のフルコースだな！」

「神とやらに惑わされるなよ」

そう言って悪魔は黒い穴に消えた。

「やっぱりあの悪魔、自分の歌が大好きなんだね」

「……」

「信頼と時の部屋って言ってたけど、これから何が起こるんだろう。青柳くんはどう思う？」

「……」

こはねの質問に冬弥は口を閉ざしている。

「青柳くんどうしたの!? さっきも立ち止まってたし、やっぱり体調が悪いの？」

「ああ、そうみたいだ。もう少しゆっくり会話したかった」

「大丈夫!? 座ってする？」

「そうだな……。とりあえずこの辺りを歩き回ってみるか」

「なんで!? 体調悪いなら動かない方がいいよ！」

「ん？ いや、体調はもう回復した。全然歩ける」

「回復するの早！ さっき体調が悪いって言ってから十秒も経ってないよ！」

「え？ 座った状態で歩くということか？」

「どういうこと!? そんなことできないよ！」

「体調はもう大丈夫だし、いける」

（私は体調良くても座った状態で歩くんてできないよ！ おかしい！ 青柳くんの様子がおかし過ぎる！

これはきつと信頼と時の部屋の影響なんだ。あの可愛い悪魔が言ってたように思考しないと。どうして青柳くんがいきなり変なことを言い出したのか……？

体調が回復するのも早過ぎるし……。いや、よく考えたら、可愛い悪魔がいなくなっただけ、私が話しかけたのを青柳くんが無視したところからおかしいんだ！」

「ちょっと待って、青柳くん！ 私たちはきつと信頼と時の部屋の影響でおかしくなってるんだよ！ 一旦落ち着こう！」

「十秒前にそんなこと言ったか？」

（嫌味!? あらかじめ言っておけてこと? ……いや違う。これは信頼と時の部屋が言わせてるんだ。落ち着いて私！ 可愛い悪魔の言葉を思い出そう。きつと、思考しないと何も見えない。脳ミソを回すんだ!）

「青柳くん、落ち着いて考えよう。この信頼と時の部屋ではきつと、普通に会話ができなくなってると思うの」

「できないって何が？」

（会話だよー！ ダメ！ 心の中でツツコミ入れて
ちゃ……。 ゆっくり一から考えてみよう。大丈夫、

きつとヒントがあるはず。あの可愛い子はこの部屋によって信頼関係が失われると言った。つまり、この部屋が私たちに何か悪い影響を与えていて、その影響で青柳くんの言葉がおかしく聞こえるんだ。……。ん？

ということは、私が話していることも青柳くんには変な言葉に聞こえているのかな……。？ じゃあ逆にあえて変なことを言ったらどうなるんだろう？ うーん、思考を止めちゃダメだ！ 一度やってみよう！）

「りんご！ ゴリラ！ ラッパ！ パセリ！」

「うん、そうだな。俺も小豆沢もおかしくなってる。一旦落ち着こう」

（いや冷静!! 恥ずかしい！ おかしなことを言った私がバカみたい！ そしてわからない。今のは会話が通じたの？ 変なことを言ったら通じるのかな？ がんばれ私！ あの可愛い子を信じて、もう一度変なことを言ってみよう！）

「すいへーりーべー僕の船！ 英語で言ったらマイ

シップ！」

「うん、俺もそう思う」

（通じてない!! すいへーりーべーに対して俺もそう思うなんて訳のわからない返事を青柳くんがするはずがない！そして恥ずかし過ぎる！これじゃあ、ただ無意味に二回も変なことを言っただけの人だよ。結局、この部屋の謎もわからないし……。どうしよう、私はどうしたらいいの？）

「うーん」

パフッ！

その時、部屋の闇に隠れていた無数の蠟燭に一斉に火が灯った。両脇に連なる蠟燭の先には祭壇があり、その上には立派な額縁に似つかわしくないポツカリと穴が空いたような絵が飾られていた。冬弥はその絵の中から何かがこちらを見ているような気がした。そして、何かが実在すると気づくのは、ほんの数秒後のことだった。絵の中から現れたのは齢六十歳から七十歳

ほどの男性。高そうなスーツを着ており、右手にはマイクを二本、体長は四十〜五十センチくらいである。

「皆さんこんにちは。私は神です。」

「悪魔の次は神様か」

「私はきつと、皆さんのお役に立てるでしょう！」

「私たち会話ができなくて困っているんです。この信頼と時の部屋は私たちに何をしているんですか？」

「私は皆さんのお悩みを抜本的に解決いたしましょう！どんな小さな言葉にも耳を傾け、皆さんが安心して暮らせる世界を実現します」

「あの、この部屋がなんなのか知りたいんですが？」

「何より大切なのは、皆さん一人一人が日々の生活の中で感じる小さな不安を解消すること。そして、この世界が変わることなく存在し続けることなのです。そのため、この信頼と時の部屋はあります。この信頼と時の部屋では皆様が感じる小さな不安、悩み、恐怖が顕在化するのです」

「つまり、お互いの悩みや心の声が聞こえているってことですか？」

「この部屋があることによって、私は全ての人々が平等に幸せな世界を実現します！」

「本当ですか？　心の声が聞こえているのとは、なんとなく違う気がするんですが……」

「私にお任せいただければ大丈夫です！　ぜひこの神をよろしくお願いいたします」

そう言うのとそれは去っていった。

「小豆沢、俺はあの神とやらが言うことがあまりしつくり来ないんだが……小豆沢はどう思う？」

「りんご！　ゴリラ！　ラッパ！　パセリ！」

（やっぱり、この部屋はおかしい。そして、小豆沢の心の声が、りんご！　ゴリラ！　ラッパ！　パセリ！

なんてありえない。悪魔は最後に神とやらに惑わされるなよと言った。悪魔と神、どちらが正しいことを言っているかはわからない……が、ずっと自分の都合

の良い話をしていた神とやらに対して、悪魔は少なくとも俺たちの話を聞いてくれていた。俺は悪魔の言葉を信じよう。この部屋は神と名乗るあいつが言った心の声が聞こえるのとは、また違った異変が起きているんだ）

「大丈夫だ！　一緒に解決策を考えよう」

「すいへーりーべー僕の船！　英語で言ったらマイシップ！」

（訳がわからない！　だが、大丈夫だ。小豆沢と俺で解決できない問題はないはずだ。悪魔の言った通り、思考を巡らせるんだ。そして、小豆沢と一緒にここを出る！）

「何があっても俺は小豆沢の味方だ」

「うーん」

（小豆沢はきっと、俺よりももっと考えているはずだ。信じよう。お互いを信じるんだ）

「俺は小豆沢を信じている！　俺たち二人なら、きっ

と無事にこの部屋から出られるはずだ」

「私も、可愛い子を信じたいな」

（可愛い子……!? いや落ち着け、ここは信頼と時の部屋。小豆沢を信頼するんだ）

「心配ない！ 俺は小豆沢を信じている」

「ありがとう、青柳くん」

（お互いがお互いを信じていればきっとこの部屋から抜け出せるはずだ！）

「俺は小豆沢を信じている」

「うん。ありがとう！ 青柳くん」

「俺は小豆沢を信じてる!!」

「私も青柳くんを信じてる!!」

パシュッ!!

その時、突然幕を閉じるように、部屋が姿を消した。そして、二人の目の前に広がるのは駅のホームだった。

——まもなく、セカイ行きの列車が到着します。黄色い線の内側までお下がりください。

「俺たち、あの部屋を出られたのか？」

「うん、きっとそうだよ！ 理由はわからないけど、私たちの信頼がああな部屋を飛び越えたんじゃないかな？」

「よかった！ 普通に会話ができる」

「本当だね。ありがとう、信じてるって言ってくれて」
「ああ。小豆沢もありがとう」

暗闇から悪魔が二人の姿を覗いていた。

「まさか、この部屋の謎を解明せずにこの部屋から出してしまうとは。この部屋では時が人々の信頼を奪う。つまり、お互いの言葉が遅れて聞こえてくるのさ。それだけで大抵の人間はお互いを信じられなくなる。そして、一度失いかけた信頼を取り戻し、この部屋に入ってきたときよりもさらにお互いを信頼しないと、この部屋から出ることはできない」

悪魔の笑った口元がさらに緩んだ。

「久しぶりに面白いものを見た。あの二人ならこの先
どれだけ時が経っても、信頼を失うことはないだろう」
そう呟くと、悪魔はセカイの果てに飛んで行った。
ぴよこぴよこぴよこと。